

# 保育の実践と研究において、 数量化は果たして有効か

東 喜代雄

今年五月、四国で行われた日本保育学会第四十三回大会（於・松山東雲短期大学）ではシンポジウムが七本もあった。企画シンポが二本と自主シンポが五本である。今年はこのほかに招待講演と小講演が三本あったから、とてもバラエティーに富んだ大会だった。

私は昨年ひき続き、静岡大学の下山田裕彦氏と共同企画者として、自主シンポジウムⅣに臨んだ。そのテーマは、

「保育の実践と研究において、数量化は果たして有効か」である。

なんともエキサイティングなテーマである。われながら向こう見ずで大胆なテーマに、準備の段階から冷や汗をかき、また当日は参会者から袋たたきにあって、二度と学会に顔が出せなくなるのではないかと恐れられた。

案の定、話題提供者の決定まではつまりぎの連続だった。依頼状を出しても返事がこなかったり断られたり、一応はOKが出ていてもあとになって断られたり、それ

でも男性陣は早々にそろったが、女性のOKが得られにくかった。

「主題設定の理由」には次のように書いた。

「今日の日本保育学会の研究発表をはじめ、保育に関する学術論文を見るにつけ、アンケート調査や研究をさまざまに数量化したものが多いのに驚かされる。各々の大学の幼児教育専攻の卒業論文にもそれが多く見られる。

私たちは長い間、子どもの心を理解したり保育を考えたりする上で、数量化は果たして有効なのかという疑問を抱いてきた。

そこで今回は、さまざまな研究論文のうち数量化された内容の実態をつかみ、それについて考察し、それらは幼児を理解し、保育を進める上でどのように有効なのか、反対に数量化に否定的な側面があるとするれば、それに代わるどのような研究が求められるのかを考えてみたい。

日本保育学会第四十三回大会を機に、率直に私たちの疑問を提起して、学会員のみなさんと討論してみたと思う。このような作業が今、緊急に求められていると信ずるからである。」

先に「なんとも向こう見ずな、エキサイティングなテーマ」と書いたが、じつはものごとを数量で見、数量化で判断する傾向は、数年来の私の疑問であった。その疑問ははじめは小さかったが、しだいに大きくなり、黙って見過ごせなくなった。ことに一九八六年、日本福祉大学で大会が開かれたとき、私の斜め前に座っていた若い女性（あとでわかったことであるが鹿児島市の保育園にとめる主任保育）が、研究発表のあとの討論のとき質問をした。

彼女はいかにも現場の保育者らしい態度で訥々として語ったが、終わりのところで、

「そんなに数字をいっばい並べただけで、子どもがわかったといえるのでしょうか。」

と意見をいい話を結んだ。なるほど子どもは「今」という一瞬一瞬を力動的に生きている。それはくり返されることはあっても、すべて一回性のもので、絶えず先へ先へと進んでいく。そんなふうに生きて動き続ける子どもの世界を、もっともらしい数字の羅列で、「理解しよう」とか「わかった」というのはどだい無理なのではないか。

今日学会で発表される研究発表は、非常にスマートで、科学的というか理論的なものが多いように思う。それらはどのように現場で役に立つのだろうか、生命的に生きて働くのだろうか——私の素朴な疑問であった。

さてシンポジウムの話題提供者には大阪市立大学の堀智晴氏、鳴門教育大学の浅野弘嗣氏、それに現場代表ということで川崎市立南生田保育園の今井和子氏に登場してもらい、指定討論者には上越教育大学の南館忠智氏をお願いした。もちろん静岡大学の下山田氏は話題提供者として加わった。司会は私である。

このメンバーは、障害児との総合保育を実践している者、モンテッソーリー・メソッドの研究者、教育思想、教育哲学、心理学の研究者で、それに幼稚園、保育園の実践者が加わり、いわば研究者と実践者の集合体である。保育学会でなければ編成できないようなチームではないだろうか。

じつは私たち心の心の中にはこんな思惑があった。現場で本場に役に立つ研究を、さまざまな研究分野をもった人たちが、自分の研究をもちより、またその領域にとらわれないで、意見や成果を出し合い、また実践者も日常の実践記録や研究レポートを提示しながら、それぞれを積み重ねつつ、生かし合う方法はないものかということである。

つまり研究者と実践者が自分の経験を自分の中に留めておくだけでなく、みんなに役立つように研究や記録や実践を共有の財産としていく学際的な努力が今必要となっているのではないかと思うのである。

そのとりかかり（糸口）が「数量化」について考える

ことであつた。

しかし、いかに数量化に疑問があるといつても、そのすべてを否定しきることはできないであらう。科学的研究の成果は、子どもの保育に関してもある種の輪郭や概念を導き出しているし、心理学など現代の科学が導き出した人間の行動に関する一般原理や理論は大きな意味をもっている。それらの成果は人間についての一般的理解を広げてくれるし、多様な角度から人間を見るのに役立つに立っている。

そんなわけで、主題設定の段階で「さまざまな研究論文のうち、数量化された内容の実態をつかみ、それについて考察して」などと書いたが、実際にはその辺について触れる事などできるはずもないと思つていたし、その必要もないと思つた。

つまり私たちの「数量化」は、今日科学的保育研究と呼ばれる研究方法とか、安易に数量化することが学術的であるかのような錯覚に対するアンチテーゼとして、象

徴的に使つたと理解してほしいのである。

\*

学会が始まってみると、この「数量化」は招待講演（梨花女子大学校師範大学李相琴教授）の中で取り上げられ、小講演の中でも話題になつた。個人発表の中でも複数の人が「今回は数量化のシンポジウムがあるようですが……」といつては気にしているようすがうかがわれた。

そんな意味でも、このシンポジウムがもてただけでも意義はあつたと思つている。

会場には多少の出入りはあつたが、一二〇人を超える参加者があつて盛り上がった。シンポジストの発言と同じくらいフロアの参加者の発言が多く、示唆に富んだ内容はそれぞれに貴重であつた。

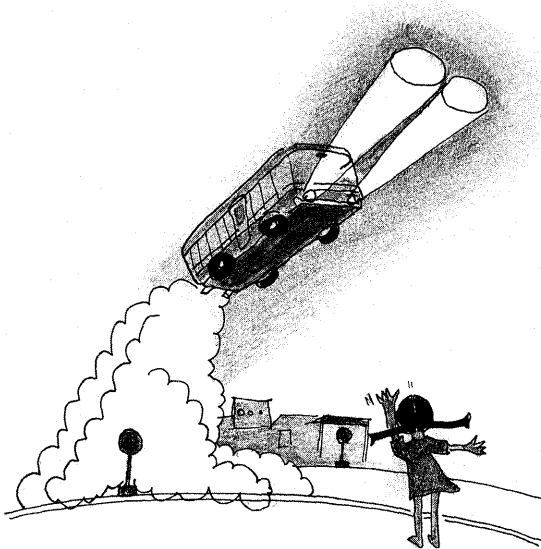
発表は概して企画者の意図を反映するものが多かつた。すなわち実験法、観察法、調査法など、科学的とよ

ばれる精緻な研究方法は、大量なデータを統計的に処理して結論づけようとするが、そのやり方はかえって子どもの姿から遠ざける結果を生んでいること、大量の事例を集めて、いかにも物質を対象とするような手法で統計的に処理しようとしてもおのずと限界があること、ことにそれは平均値でもの見ようとするから、一人ひとりの人間が抜け落ちてしまうこと、人間は本来全体性と統一性をもつ人格的主体であるが、自然科学は人間を一度ばらばらに分解して、分析してみようとする。分析と総合の調和をどうつけていくのか、など研究方法をめぐる基本的な問題が指摘された。

A・シャールドが指摘するように研究者も実践者も子どもとの関係の中に身をおいて、かかわりをもちながら、その中で子ども自身の見方や感じ方に従って理解する必要があるのではないかとということが強調された。

津守真氏（愛育養護学校校長）が、「他者と共同の生活を形成するときの人間関係においては、科学的法則や知識を適用するのではなく、生活を共にする中で、同じ

人間として考える想像力を自らの中に開くことが課題である。その解釈の妥当性は、子どもが喜んで毎日を生きるられるかどうかによって決められる。」（「出会うことと



省察すること」(所載)と書いているが、けだし今後の課題としても日常のありのままの場面に即応して、できるだけ人為的な手を加えないで、ありのままの保育現象をとらえようとする方法が研究されていく必要があることを私は討論の中に感じていた。

津守真氏といえば、このシンポは一面「津守真論」とでもいうようなものであった。堀智晴氏は、津守氏が科学的児童心理学の手法で子どもの遊びの本質を実証しようとした時代から、客観的行動観察の模索とそれへの懐疑の時代を経て、「外部にあらわれる行動の裏側に子どもの体験がある。逆にいえば体験の世界が行動とつながって外部にあらわれる」というような人間学的心理学に向かっていく保育研究の過程を、「数量化」の視点から見ていくと、おのずから答えが出てくるのではないかと指摘した。そんな興味深い話題だと私は思った。

下山田氏は、大塚久雄の理論をかりながら、すべてのことがらを量化し、できる限り数値化していこうとするならば、実質的な価値とか意味——これが保育では最も

大切なものであるが——を指の間から洩らしてしまう。「子どもと共に生きる(遊ぶ)」ことによって見えてくる心の微妙な動き、働き、ことばや行動の奥にある意味、内容は、一見非合理的、非科学的にみえる方法によって理解される。それを、私は形式合理性に対する実質合理性の原理と呼びたい。」と指摘した。

下山田氏が話してくれた具体例をここで紹介することにしよう。

氏はある具体的な目的で週末、病院を訪ねるようになってからやがて二年になる、という。氏の訪ねる病室には意識を失った人々が二〇数名いる。だから、病人が高い熱をだすと医者も看護婦も、保護者(多くの場合、家族の人々)も神経過敏になる。つまり、ある患者が三九度以上の高熱を出し続けると、生命の危機なのである。固有の名前をもつあの人、この人……となると私は他人の苦しみや悲しみをわずかではあるが理解できる。これを「ある人が今日も三九度の熱がありました」と一般的に言ってみても、悲しみ、苦しみは伝わってこな

い。このように数量化は人間の尊さという研究の大前提を忘れさせ、隣人愛の実践としての研究を曖昧にさせてしまふ傾向をもつのではなからうか。数量化の奥にある人間の悲しみ、苦しみを研究者は忘れてはならない。これが下山田氏の研究の態度と言つてよいかも知れない。

これらに対して南館氏は、まずこのテーマ設定の意味は認めながらも、それぞれのことば（「保育の実践」「研究」「数量化」とその実態、またそれらのからみあいを含めて、その不鮮明さ、不明瞭さ、困難性、必要性、整合性などを指摘した。つまり学問的な討論を行う以前の問題として、きめのこまかい討論内容の位置づけや確認が必要であるということである。

しかし当日の話題の内容には共感的な理解を示し、「私も心理学を志した一学徒として、人間である子どもを中心にすえた研究を考えていきたい。」と話された。

そういえば、テーマについてフロアからも「数量化は果たして有効か」という論点からでなく、今や「どのよ

うに有効か」ということでいいのではないかという発言があった。

私はむずかしい話し合いをすべて理解することはできなかったが、浅野弘嗣氏が中国政府に招かれて北京師範大学や南京師範大学など四大学で教鞭をとった体験をもとに、わが国が本当に世界に寄与できる教育の成果として何を示すことができるのか、ことに幼児教育に関して、早期知能教育や、画一的な管理主義的教育が、日本の幼児教育と思われている現状を報告したが、私は聞いて胸の痛みを感じたことである。

また数量化は、発達における心的なもの質的なものの変動と、感情、感性の面をどうとらえるかというむずかしさの他に、人間をどうとらえるのかという哲学の問題がかかわってくる。日本では「とらえる」というと、すぐに方法論にとびつくが、総合的な人間学が必要になってくると語った。

今井和子氏は数多くの事例を話しながら、いかに子どもたちに教えられ育てられてきたか、それなのに世は子

どもたちに目を向けるより、さまざまな情報の洪水の中で安易に子どもを評価したり、先入観をもって見てしまうとその危険性を指摘した。多数決や平均値という考え方の中からは一人ひとりを大切にすることを生み出さないし、心の出会いも得られないだろうと語った。数字に表れてこない切り捨てられる子どもたちこそ目を向けられていくべきであるというのである。

研究者も実践者も、深い愛情をもって子どもの世界を真正面からとらえようとしている姿勢に、私はとても感動した。

\*

フロアからの意見はいちいち書き止めなかったのも、ここではそれを明らかにすることはできない。それは決して他を非難したり批判したりするものではなく、それぞれの立場から意見を述べあい、互いに補完し合う討論であった。

終わりに司会者が、

「このシンポジウムは今回だけで終わるのではなく、あと三、四年は続けてやりたい。企画者もスタッフもみんな変わって、新しいメンバーで続けたらどうか」

と発言すると一斉に拍手が起ころどよめきがあった。終了まぎわにはメモがまわってきて

「この場で、次回のメンバーを募っておいた方がよい」ともあった。「自薦でも他薦でもいいでしょう」とつけ加えたことである。そして数人から個人名があげられた。

来年は一般席からこの討論に加わりたいと思っている。

(狭山ひかり幼稚園)